Japanese Association of Educational Psychology

教育心理学研究, 2010, 58, 129—139

「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす効果

―― 接触経験との関連から ――

栗田季佳* 楠見 孝**

本研究では，近年用いられるようになった「障がい者」表記に注目し，ひらがな及び漢字の表記形態が身体障害者に対する態度に及ぼす影響について，接触経験との関連から検討することを目的とした。身体障害者に対する態度については，イメージと交流態度の2つの態度次元に着目した。SD法及び交流態度尺度を用いて，大学生・大学院生348名を対象に調査を行った。その結果，身体障害者イメージは身体障害学生との交流に対する当惑感を媒介として身体障害学生と交友関係を持つことや自己主張することに対する抵抗感に影響を与えることが示された。そして，ひらがな表記は接触経験者が持つ身体障害者に対する「尊敬」に関わるポジティブなイメージを促進させるが，接触経験の無い者が持つ尊敬イメージや，身体障害学生との交流に対する態度の改善には直接影響を及ぼすほどの効果を持たないことがわかった。身体障害学生との交流の改善には「社会的不利」「尊敬」「同情」を検討することが重要であることが本研究から示唆された。特に，身体障害者に対する「尊敬」のイメージの上昇は，接触経験の有無にかかわらず，交流態度の改善に影響を与えることが考えられる。

キーワード：障害者表記，身体障害者，態度，イメージ，接触経験

問題と目的

「障害者[1]」をどう表現・表記するかという問題は，以前から議論の対象となってきた。たとえば，戦後用いられてきた「精神薄弱」という名称は，人格全てを否定するような印象を受けるという関係者の声や，障害を適切に表現していないという点から，「知的障害」へと表記変更の法改正が行われた（参議院法制局, 1998）。教育界においても，従来「障害児教育」「特殊教育」と称されてきた教育分野は，特別な教育的支援を必要とする全ての児童生徒への指導を，という考えの下「特別支援教育」へと現在名称転換が図られている。また，国外においても，アメリカでは“disabled”や“handicapped”，“persons with disabilities”など様々な表現がなされているが，最近では神から与えられた挑戦という意味から，障害者を“challenged”と呼ぶようにもなっている（Hevey, 1993）。

このような流れの中，近年，わが国では障害者を「障がい者」と改めて表記する動きが地方公共団体をはじめ，多くの場で広がっている。「害」の字に対して否定的な印象を受けるという関係者の声を反映し，さらには悪いイメージを払拭し，障害者に対する偏見や差別を解消しようという見方もある（熊田, 2002；安田, 2005）。このように，「害」の表記をひらがなに変える動きは，意識や社会のシステムを変えるプロセスとして期待されており（有田, 2005），今後もひらがな表記は増えていくと考えられる。しかし一方で，漢字かひらがなかという議論自体を無意味あるいは不快であるとする意見や，表記の問題は障害者施策において本質的なことではないとする議論もある（岐阜市, 2008；三重県健康福祉部, 2006）。このように，ひらがな表記は障害者に対する態度の変容を促すとする見方がある一方，他方で意味がないとする見方もある。果たして，表記の変更によって我々の障害者に対する態度が変わり，障害者に対する偏見や差別の解消へと向かうのだろうか。

日本語の表記形態の違いによってイメージに差が生じることを示した研究では，漢字や片仮名に比べ，ひらがなはよい・やわらかいといった特有のイメージをもつことがわかっている（杉島・賀集, 1992；浮田・杉島・皆川・井上・賀集, 1996）。これらの研究は，季語を題材に検討したものであるが，表記形態の違いによってイメージに変化が生じるならば，「障がい者」のようなひ

* 京都大学大学院教育学研究科
〒606-8501 京都市左京区吉田本町
t.kurita@fx5.ecs.kyoto-u.ac.jp
** 京都大学大学院教育学研究科
kusumi@educ.kyoto-u.ac.jp

1 もともと「害」の字は，1949年の身体障害者福祉法の制定の際に，それ以前に使用されていた「礙」や「碍」の字が当用漢字の制限を受けて使用できないために当てられ，一般的に使われるようになった。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

らがな表記は，我々の障害者に対するイメージに影響を与えることが考えられる。

しかし，障害者に対する偏見や差別の解消という目的にとってさらに重要となるのは，実際に対象者と接する際にどのような行動をとるかであり（Cuddy, Fiske, & Glick, 2007），わが国でも障害者との交流場面に焦点を当てた研究が行われている（たとえば河内, 2004；河内・四日市, 1998）。たとえひらがな表記によって障害者イメージが改善したとしても，実際の交流場面における態度に変化がなければ，障害者を取り巻く環境は改善しにくいと考えられる。イメージは態度に影響を及ぼす要因として重要視されている（e.g., 飽戸, 1970；Fisher & Hanspral, 1998；Ostrom, 1969；Sondhaus, Kurtz, & Strube, 2001；Zajonc, 1998）ことから，障害者に対する態度に関しても，イメージが影響を及ぼすということが考えられる。したがって，表記の効果をより深く捉えるためには，イメージだけでなく，より現実に即した交流場面での態度も測定し，これらの2者の関係性のどこに表記が影響を及ぼすかを検討することが重要である。

一般に，障害者に対する社会の人々の態度は否定的であるとされている（生川・梅谷・前川, 2005；山内, 1996）。障害者に対する否定的な態度の改善には，障害者との接触経験，特にボランティアのような援助経験が最も有効と考えられているが（Allport, 1954；河内, 2004），山内（1996）は，接触によるアプローチだけでなく知識のような情報提供アプローチが必要であると主張した。さらに，これに関して，接触と情報提供の関連を検討した大谷（2001）の研究は，情報提供の効果が接触経験によって異なることを示唆している。表記も一種の情報と考えられるため，接触経験の差異によって，表記による態度の変化に違いが生じることが推測される。したがって，表記の効果は接触経験との関連から検討する必要があるといえよう。

以上より，本研究では，「障がい者」表記が障害者に対する態度に及ぼす影響を，接触経験との関連から検討することを目的とする。障害種によって態度に差があることを示す研究も見られるため（たとえば豊村, 2005；渡辺・曽我, 2002），本研究ではわが国で最も多い障害種である身体障害（肢体不自由）を対象とした。

身体障害者に対する態度の指標には，イメージ尺度と身体障害者との交流に対する態度を捉える交流態度尺度を用いる。イメージの測定指標には，一般的にSD法が用いられており（岩下, 1983），障害者に対するイメージの研究についてもしばしば利用されている（たとえばAhlborn, Panek, & Jungers, 2008；安藤, 1989；中司, 1988）。わが国における身体障害者を対象とした最近の研究では，徳珍・藤田（2005）が行った調査があるが，回答者が女性に限定されていること，また，知的障害や障害一般を対象としたイメージの先行研究を参考に形容語を選んでいるため，身体障害者固有に持たれているイメージ（形容語）が漏れてしまっている可能性などの問題点が挙げられる。また，近年の身体障害者に対する社会の動きは，建築物のバリアフリー化等にみられるように，めざましく発展しており，身体障害者の社会的地位のあり方が時代によって異なることから，その世代に生活する者が持つイメージも異なっている可能性がある。これらのことを考えると，今回調査を行うに当たって，現在の身体障害者に対するイメージを新たに捉えなおす必要がある。まず予備調査において，身体障害者に対するイメージを自由連想により収集し，SD法によるイメージ尺度を作成する。その後，本調査において「障害者」表記と「障がい者」表記が，イメージと交流態度に及ぼす影響を検討する。以下，「障害者」表記を漢字表記，「障がい者」表記をひらがな表記と記す。

また，今日，大学側の支援体制の整備とともに，大学で学ぶ障害学生が増加している（全国障害学生センター, 2008）。しかしながら，健常学生は障害学生に対する様々な心理的バリアのために，障害学生との交流を困難にしていると考えられる（河内, 2006）。このことから，障害学生と健常学生の交流の改善に表記が効果的に働くかどうかを検討するため，本研究では，大学生を対象に調査を行うこととした。

予備調査

目的

身体障害者に対するイメージを自由連想により収集し，イメージを測定した先行研究を参考に，イメージ尺度を作成する。

方法

回答者 教育系の講義を受講していた関西地方の国立・私立大学の大学生及び大学院生182名（男性63名, 女性114名, 無記名3名），平均年齢19.2歳（$SD=1.62$）。

手続き 大学の講義時間を使って一斉に行った。一部は個別に依頼した。

質問紙 「身体障害者との交流に関する調査」と題された質問紙を配布した。障害者と関連のない講義であったため，障害者に関する質問に対する抵抗感や構えを低減させるために，最初に障害者問題を含めた様々な社会問題に対する関心の程度を尋ねた。全ての

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

回答者が回答を終えた後に，身体障害者のイメージを自由連想で求めた。連想語は形容詞，形容動詞，動詞と限定した。5分間の制限時間を設け，その間集中して回答するよう促した。

結果

延べ574語が収集された。頻度の高かったものは順に，不自由だ（69），大変だ（43），不便だ（32），辛い（26），弱い（19），頑張る（17），強い（17），遅い（14），苦しい（13），明るい（12）であった。高頻度で出現した形容語は，一般的に持たれている身体障害者のイメージであると考えられるため，それらに対する表記及び経験の影響を検討することは重要であると考えられる。高頻度であった形容語をもとに，身体障害者のイメージを測定した先行研究及び他障害種を対象としたイメージ研究を参考にし（安藤, 1989；上瀬, 2001；河内, 2001；松村・横川, 2002；中司, 1988；徳珍・藤田, 2005），イメージ尺度で用いる形容語を選定した。選定した形容語とその反対語を対にし，合計21対の形容語対を構成した。順番と左右をランダムに配置し，イメージ尺度を作成した。

本 調 査

目的

今回新たに作成した身体障害者イメージ尺度と既存の障害者との交流態度尺度を用いて，表記の違いが身体障害者に対する態度構造を変化させるのかどうかを，接触経験との関連から検討する。

方法

回答者　関西及び中国地方[2]の国立・私立の大学生及び大学院生348名（男性119名, 女性205名, 無記名24名），平均年齢19.9歳（$SD=2.1$）。

手続き　大学の講義時間を使って一斉に行った。一部は個別に依頼した。質問紙は，「身体障害者」を漢字表記にしたものとひらがな表記にしたもの（「身体障がい者」）を用意し，ランダムに配布した。

調査内容

1．イメージ尺度　予備調査で作成した身体障害者に対するイメージを表す形容詞21対について7件法で回答を求めた。“どちらでもない”を中央に配置し，“非常に”までその形容詞の当てはまりの程度を評定させた。

2．交流態度尺度　障害者に対する交流態度の測定において，尺度の信頼性，妥当性が確認されており，身体障害者に適用できるものとして，「当惑」尺度及び「抵抗感」尺度（河内, 2003, 2004, 2006）を取り上げた。

河内（2002, 2003, 2004）による「当惑」尺度（8項目）は，障害者観尺度（河内, 2002）の下位尺度として用いられたもので，障害者との交流に対する当惑の測定尺度である。なお，本尺度は「○○障害の人には気軽に声がかけられない」など回答自体に抵抗感をもたせるような項目を含んでおり，本調査も障害者とは無関連な講義中に行ったため，回答に対する抵抗感を低減する目的で，障害者観尺度の下位尺度となっている「統合教育」尺度（河内, 2002, 2003, 2004）と併用して使用した。「統合教育」尺度（8項目）は，「○○障害の子どもは，普通学校の中で十分に活動できる」等，統合教育に対する考え方を示すものである。最初の2項目を「統合教育」尺度から選び，それ以降の項目はランダムに配置した。本研究では，身体障害者に対する交流態度の測定を目的としているため，「統合教育」尺度は分析からははずすこととした。各項目に対して，“全く同意できる”から“全く同意できない”までの6件法で回答を求めた。得点が高いほど障害者と交流することに対する当惑が高いことを示す。

抵抗感尺度は，「○○障害の学生とレストランで食事をする場合」など，障害のある学生との交流に対して表面的・建前的な意識を表す「交友関係」尺度（9項目）と「○○障害の学生が自分でできると思われるので手伝いを断る場合」など，本音の意見を示す「自己主張」尺度（9項目）の2つの下位尺度から構成されている（河内, 2006）。それぞれ，ある特定の交流場面において，よく知らない障害のある学生に対して自らがとる行為が記述されている。各項目に対して，どの程度抵抗を感じるかを，“抵抗がある”から“抵抗がない”までの5件法で回答を求めた。得点が高いほど，障害者との交流場面において抵抗を感じることを示す。

障害種を身体障害に特定し，これらの尺度を使用した。各下位尺度の平均得点をもって，表記の差異の影響を接触経験との関連から検討する。

3．接触経験　接触経験の中でも，特にボランティアのような援助経験が重要であり（河内, 2004），本調査で用いる態度尺度を使用した河内（2004, 2006）の研究においてもボランティアによる接触経験を検討していることから，本研究では，ボランティアによる接触を接触経験として取り上げる。本研究では身体障害者に対する態度を検討するため，身体障害者に対するボラン

[2] 本研究の調査対象地域は2県にまたがっていたが，以下で行う調査のいずれの尺度についても県による差違がみられなかった。このことから，本研究においては県の違いによって身体障害者に対する態度に違いはないと判断した。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

ティア経験を“今までにしたことがある”か，“現在している”か，“今まで一度もしたことがない”かを3件法で尋ねた。過去経験・現在経験をボランティア経験の有る者として，未経験者をボランティア経験の無い者として分析の対象とする。以下，身体障害者に対するボランティア経験の有る者を「経験有」，経験の無い者を「経験無」と記す。

結果と考察

1．身体障害者イメージ尺度

身体障害者イメージの構造と，イメージに対する表記及び経験の影響を検討するために，イメージ尺度を用いて分析を行った。

(1) 因子分析によるイメージの構造の分析 回答に欠損のある回答者や，明らかに虚偽を含むと考えられた回答者32名は分析から除外した。最終的に316名が有効回答者となった。有効回答者の内，経験有は164名，経験無は152名であった。

中央点を4点とし，各項目に1点から7点を与えた。身体障害者を表すイメージとして選定された形容語に非常に当てはまるものを7点，反対語に非常に当てはまるものを1点とした。最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。共通性の低かった(.20未満)2項目と，因子負荷量が.40に満たない1項目を削除し，固有値の減衰状況や解釈可能性から，最終的に3因子を抽出した。因子分析の結果はTable 1に示す。

第I因子は，“不利な”“困難な”“気の毒な”などの形容語がみられ，身体障害の特性による社会的不利な状態を表す形容語である。これはWHO(世界保健機関)のICIDH(国際障害分類)に基づく「社会的不利(handicaps)」を表していると考えられるため，第I因子を「社会的不利因子」と名付けた。第II因子は，“立派な”“尊敬できる”“頑張っている”など，身体障害者に対する尊敬を表していると考えられるため，第II因子を「尊敬因子」と名付けた。第III因子は，“悲しい”“辛い”“不幸な”など，身体障害者に対する回答者の同情心を表す形容語がみられる。したがって，第III因子を「同情因子」と名付けた。

身体障害者のイメージの構造として，「社会的不利」・「尊敬」・「同情」の3つが抽出された。これらは，予備調査より得られた主要なイメージを次元縮小させたものであり，身体障害者に対するイメージ構造の中核部分であるといえる。「社会的不利」は，身体障害の事実に基づく困難さ，その事実により被る不利・不便に関するイメージであり，徳珍・藤田(2005)の研究でも確認されている身体障害者の中心的なイメージと考えられる。障害者に対する「尊敬」は，近年になってみられるようになったイメージである(河内, 2001)。ノーマライゼーションの普及を始め，今日の身体障害者を取り巻く環境の変化とともに，身体障害者に対する我々の態度にも変化が生じていることが伺える。このことは，社会の変化が障害者に対する態度に影響を及ぼすことを示したMcCarthy(1984)の主張とも一致している。「同情」のイメージに関しては，障害者に対するイメージの中で最も一般的であるといわれており，わが国でもしばしば確認されている(河内, 2001；松村・横川, 2002)。また，障害者に対する同情は援助行動を促進することも指摘されており(Willner & Smith, 2008)，身体障害者に対する援助について検討する際には重要なイメージ要素であるといえる。

Table 1 身体障害者イメージのSD法評定の因子分析結果

形容詞	I	II	III	共通性
第I因子 社会的不利 (α=.845)				
不利な	**.817**	.018	.006	.578
生活上の危険	**.748**	.047	-.118	.436
困難な	**.691**	.104	-.041	.438
不自由な	**.648**	-.005	.091	.511
気の毒な	**.640**	-.136	-.039	.413
遅い	**.613**	.087	.017	.506
かわいそうな	**.425**	-.152	.196	.404
第II因子 尊敬 (α=.715)				
立派な	-.133	**.728**	.123	.394
尊敬できる	-.070	**.640**	.004	.415
あたたかい	.102	**.587**	.112	.378
頑張っている	.123	**.558**	.059	317
偉い	-.090	**.405**	-.004	.226
優しい	.173	**.391**	-.110	.235
第III因子 同情 (α=.719)				
辛い	-.019	.034	**.797**	.438
悪い	-.108	.001	**.578**	.318
悲しい	.252	.080	**.508**	.438
不幸な	.104	-.136	**.496**	.297
固有値	3.863	2.050	2.756	
因子間相関				
I		-.068	.566	
II			-.144	

註 太字は因子負荷量.350以上を示す

(2) イメージにおける経験・表記の影響 各因子のSD評定の平均値を算出し，表記と経験によるイメージへの影響を検討した。各因子とも，得点が高いほどその因子のイメージが強いことを示す。有効回答者を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

経験（2条件：経験有・経験無）及び表記（2条件：漢字・ひらがな）によって分類した。群分けの結果，経験有・漢字表記群（83名），経験有・ひらがな表記群（81名），経験無・漢字表記群（76名），経験無・ひらがな表記群（76名）となった。各群の因子別SD評定の平均値はTable 2に示す。各因子の平均値毎に，経験（2）×表記（2）の被験者間分散分析を行った。

2要因分散分析の結果，「社会的不利」因子については，経験及び表記の主効果はみられなかった。このことは，身体障害の特徴・特性を表すイメージは，接触や表記の影響に左右されず，一様に持たれているイメージであることを示している。

同様に「尊敬」因子について，2要因分散分析を行ったところ，経験と表記の交互作用が有意であった（$F(1,312)=6.69, p<.05$）。下位検定の結果，経験有群において表記の単純主効果がみられ（$F(1,312)=4.48, p<.05$），また，ひらがな表記において経験の単純主効果がみられた（$F(1,312)=7.92, p<.05$）。すなわち，身体障害者との接触経験が有る者にとって，漢字表記よりもひらがな表記の方が身体障害者に対する尊敬のイメージが強く，ひらがな表記時に，経験無群よりも経験有群において尊敬イメージが高いことがわかった。一方，接触経験の無い者には表記が漢字かひらがなかで尊敬イメージに差はみられず（$F(1,312)=2.38$, *n.s.*），接触経験の無い者が持つ尊敬イメージに，表記が影響を及ぼさないことがわかった。これらの結果は，ひらがな表記が，接触経験の有る者が持つ尊敬イメージに対して影響を及ぼすことを示している。このことは，接触経験者が持つ身体障害者に対する尊敬のイメージが，ひらがなのもつ良いイメージによって促進されたと解釈できる。

「同情」因子については，経験及び表記の効果はみられなかった。MacLean & Gannon（1995）は，障害者に対する同情には接触経験が影響しないことを明らかにしており，本研究においてもそのことが確認された。さらに，本研究では表記についても同情イメージには影響がみられなかった。この結果は，身体障害者に対する同情が，これらの影響を受けにくく，頑健なものであることを示唆している。

2．交流態度尺度

身体障害者との交流場面に対する態度について，接触経験と表記の影響を検討するため，当惑尺度及び抵抗感尺度を用いた。有効回答者を経験（2）×表記（2）で群分けをし，被験者間2要因分散分析を行った。抵抗感尺度については，下位尺度である交友関係尺度と自己主張尺度に分けて分析を行った。結果はTable 2に示す。

(1) 当惑尺度における経験・表記の影響 当惑尺度においては，分析の結果，経験の主効果のみ有意であった（$F(1,312)=21.45, p<.01$）。つまり，身体障害者との接触経験が無い者は，接触経験が有る者よりも，身体障害者との交流に対する当惑が強いことを示している。このことから，身体障害者との実際の接触が，当惑を低減させていることが示唆される。表記の主効果及び交互作用はみられず，交流の当惑の低減には表記の影響がみられなかった。

(2) 抵抗感尺度における経験・表記の影響 抵抗感尺度の下位尺度である交友関係尺度及び自己主張尺度について分析した結果，有意差があったのは，交友関係尺度における経験の主効果であり（$F(1,312)=9.01, p<.01$），接触経験の無い者は，接触経験の有る者よりも身体障害者との表面的・建前的な交流に対する抵抗感が高いことを示している。このことから，接触経験は身体障害者と表面的交流に対する抵抗を軽減させると考えられる。しかし，「自己主張」尺度では経験による

Table 2 身体障害者イメージ尺度及び交流態度尺度の平均値（*SD*）と分散分析

	経験有（$n=157$）		経験無（$n=159$）		主効果（F 値）		交互作用
	漢字表記（$n=83$）	ひらがな表記（$n=81$）	漢字表記（$n=76$）	ひらがな表記（$n=76$）	経験	表記	（F 値）
イメージ							
社会的不利	4.84(0.71)	4.86(0.87)	4.59(1.02)	4.71(1.04)	3.77†	0.45	0.18
尊敬	4.57(0.55)	4.78(0.76)	4.65(0.58)	4.50(0.61)	1.94	0.17	6.69*
同情	4.18(0.61)	4.21(0.71)	4.21(0.63)	4.18(0.69)	0.00	0.00	0.12
交流態度							
当惑	3.15(0.68)	3.05(0.82)	3.40(0.76)	3.60(0.74)	21.45**	0.29	2.87†
交友関係	2.30(0.80)	2.07(0.68)	2.45(0.78)	2.43(0.70)	9.01**	2.11	1.68
自己主張	2.86(0.82)	2.71(0.73)	2.92(0.78)	2.92(0.76)	2.39	0.71	0.86

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

影響がみられず，ボランティア経験は本音の主張に対する抵抗感の低減に効果がないことがわかった。これらの結果は先行研究（河内, 2004, 2006）とも一致しており，河内（2004）が指摘するように，援助活動のような接触は，健常者側にとっては表面的な交流となっていることが示唆された。このことから，ボランティアによる接触経験が交流態度に及ぼす影響は，あくまで表面的な交流にとどまっていることが考えられる。障害者との接触は，一方向的に障害者を援助する形で行われることが多く（Scott, 1969 三橋他訳, 1992, pp.48-51），障害者と健常者が本音を言えるような対等な関係になることが困難であることを示す結果となった。また，抵抗感尺度においても表記の主効果及び交互作用はみられず，身体障害者との交流に対する抵抗感の低減に表記が影響しないことがわかった。

このように，交流態度においては，いずれの下位尺度に関しても，接触経験のみ効果がみられ，表記に関しては効果がみられなかった。つまり，身体障害者と交流する際には，「障がい」表記が直接的に交流態度に影響を与えることはなく，やはり接触という実際の交流によるアプローチが重要であるということを示している。

3．身体障害者イメージと交流態度の関係における表記の影響

イメージと交流態度の関係において，表記がどのように影響を及ぼすかを検討するに当たって，身体障害者イメージが交流態度に影響を及ぼすという仮説モデルをたて，パス解析を行う。まず，モデルの生成に当たって，全回答者及び経験別に相関分析を行った（Table 3）。相関分析の結果をもとに，それぞれの身体障害者イメージが交流態度に影響を及ぼすという仮説モデルを作成した（Figure 1）。全回答者に対して，イメージ尺度及び交流態度尺度の下位尺度を観測変数，表記をダミー変数（漢字表記＝0；ひらがな表記＝1）とし，有意な相関のみられた変数についてパスを加え，パス解析を行った。解析には Amos 16.0 を用いた。その結果，

Table 3 全回答者及び身体障害者との接触経験別による下位尺度毎の相関係数

経験		尊敬	同情	当惑	交友関係	自己主張
社会的不利	全体	-.029	.509**	.176**	.012	.128*
	経験有	.087	.427**	.181*	.023	.217**
	経験無	-.155†	.591**	.239**	.037	**.075**
尊敬	全体		-.100†	-.236**	-.186**	-.050
	経験有		-.084	**-.170***	-.181*	.030
	経験無		-.119	**-.292**	-.171*	-.134†
同情	全体			.158**	.118**	.065
	経験有			.155*	**.137†**	.145†
	経験無			.169**	**.099**	-.022
当惑	全体				.558**	.401**
	経験有				.521**	.422**
	経験無				.562**	.363**
交友関係	全体					.528**
	経験有					.439**
	経験無					.598**

条件間に違いがみられた箇所を太字で記した　† p=.10, *p<.05, **p<.01

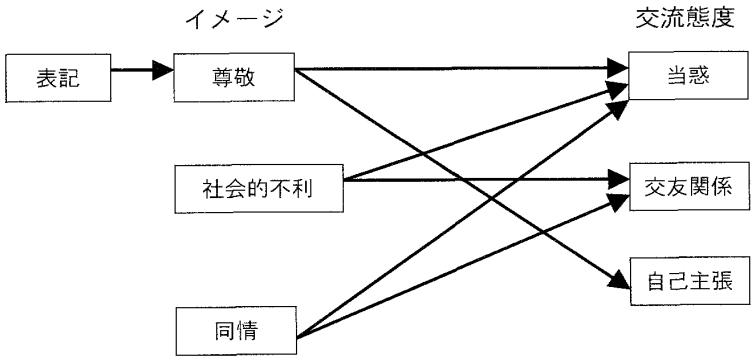

Figure 1 イメージと交流態度のパスモデル（修正前）

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

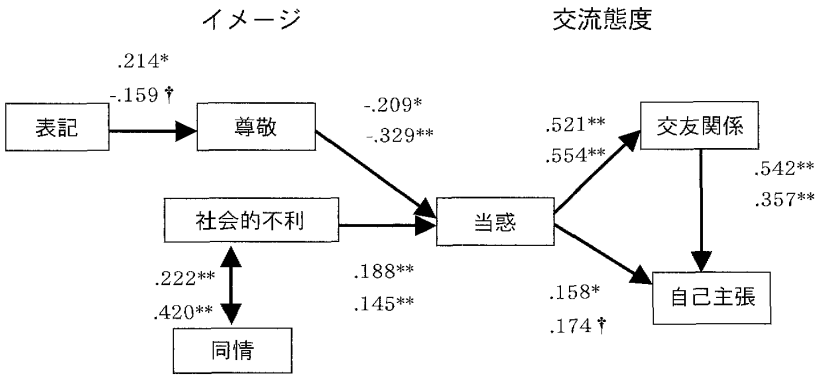

Figure 2 障害者との接触経験の有群（上段）と無群（下段）におけるイメージと交流態度のパスモデル（修正後）
† $p<.10$, $*p<.05$, $**p<.01$

GFI＝.772, AGFI＝.542, RMSEA＝.272 と適合度の低いモデルとなった。

このように適合度の低いモデルとなったことには次の2点が考えられる。まず1点は，もともと別の尺度である当惑尺度と抵抗感尺度をまとめ併せているということである。身体障害者の各イメージは当惑尺度と相関を示しており，当惑尺度はまた，抵抗感尺度とも相関を示している（Table 3）。さらに，各尺度の項目に注目すると，抵抗感尺度は具体的な交流状況における行動を示しており，一方で当惑尺度は交流に関する一般的な行動を示している。態度が行動を予測する変数（猪俣, 1982）として考えられていることを踏まえると，具体的な行動の項目から成る抵抗感尺度は障害者との実際の交流により即して捉えている指標と考えられ，一般的な障害者との交流に対する当惑感を表す当惑尺度を反映することが考えられる。これらを考慮すると，身体障害者イメージが身体障害者との交流に対する当惑感を経由し，交友関係や自己主張に対する抵抗感へとつながるというパスが考えられる。

もう1点は，「同情」は障害者に対してポジティブな影響をもたらすことが示されていることから（Angermeyer & Matschinger, 2003 ; MacLean & Gannon, 1995），「当惑」や「抵抗感」を増幅するような正の寄与をもたらすとは考えにくいという点である。「同情」は「社会的不利」と相関関係にあることから，「同情」は「社会的不利」に伴うイメージであるが，「同情」それ自体が当惑をもたらす要素ではないことが考えられる[3]。このような理由から，「同情」から「当惑」へのパスを削除した。

以上より，「尊敬」及び「社会的不利」イメージが「当惑」を媒介として「交友関係」及び「自己主張」に影響を及ぼすというモデルに修正した（Figure 2）。パス解析の結果 GFI＝.977， AGFI＝.954，RMSEA＝.052 となり，仮説モデルの適合度が大幅に改善された。Figure 2 から，表記が尊敬を媒介として，当惑，さらに交友関係や自己主張へつながるということが示された。また，社会的不利イメージは同情イメージと相互に関連し，当惑感を高め，交友関係や自己主張への抵抗を高めていた。

そこで，上記の仮説モデルについて，経験の有無によるモデルの違いを検討するため，多母集団同時分析を行った。その結果，GFI＝.964，AGFI＝.927，RMSEA＝.038 と十分な適合度が得られた。Figure 2 より，経験有群において，ひらがな表記は尊敬イメージを高め，それが当惑を減少させ，さらに具体的交流場面において身体障害者と交友関係を持つことや身体障害者に自己主張を行うことに対する抵抗感を減少させることにつながるといえる。また，当惑から交友関係を媒介して自己主張へのパスがみられた。交友関係尺度は交流の初期の段階を示す尺度と考えられるため（河内, 2004），表面的な交流から自己主張をするようなより深い交流へと，段階を踏んで交流を深めている過程が示唆された。

このように，経験有群において，表記から尊敬イメージへ，尊敬から当惑，抵抗感へとパスがみられた。しかし分散分析の結果からは，交流態度に及ぼす表記の効果はみられなかった。この点に関しては，表記が直接交流態度に影響を与える要因ではなく，尊敬イメージを媒介として間接的に影響を与えているため，その効果が弱くなっていると考えられる。

[3] 「社会的不利」イメージを制御変数として，「同情」と「当惑」の偏相関分析を行ったところ，相関係数は $r=-.099$ ($p<.05$) と，ほぼ無相関であった。したがって，このことも「同情」と「当惑」が直接関係しないという考えを支持している。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

また，「尊敬」イメージに関して，「当惑」及び「交友関係」に負のパスがみられたことは注目すべき点である。このことは，身体障害者に対する「尊敬」のイメージを強めることが，交流への当惑や表面的交流に対する抵抗感を軽減することにつながる影響力を持つ可能性を示している。この点は，身体障害者に対する態度を変容させるための重要な示唆を与えていると考えられる。

総合考察

本研究は，「障がい者」表記が身体障害者に対する態度に及ぼす影響を，イメージと交流態度に注目し，検討した。本研究の結果より，表記が影響を及ぼすのは身体障害者に対する尊敬イメージであり，その影響は接触経験の有る者においてのみ現れることがわかった。すなわち，表記の効果とは，身体障害者との接触経験が有る者が持つ，身体障害者に対するポジティブなイメージの促進といえる。これらの結果は，日本語表記について言及した先行研究と，ひらがながポジティブな方向で特有のイメージを形成しているという点では一致しているが（浮田ら, 1996），本研究ではそれが特定の集団にのみ現れるという点についても明らかにした。表記が接触経験の有る者に影響を及ぼすのは，彼らが障害者に対してより高い関心を持っているため（河内・四日市, 1998），表記が持つイメージ情報をより敏感に感じ取った可能性が考えられる。山内（1996）は，障害者に対する偏見は無知なるがゆえのものであると主張し，障害者に対する態度の変容には，接触をした上での情報提供の必要性を説いている。したがって，ひらがな表記のポジティブな影響が接触経験の有る者において現れたことは，山内の主張を支持しており，情報提供と接触の相乗効果を示唆している。しかし一方で，接触経験の無い者が持つ尊敬イメージには表記の差異による効果はみられず，また，経験の有無にかかわらずその他のイメージや交流態度に関しても表記の直接的な効果はみられなかった。

以上まとめると，表記の効果とは，接触経験者が持つ身体障害者に対する「尊敬」に関わるポジティブなイメージの促進といえる。しかしながら，そのような効果は接触経験の無い者ではみられず，さらに身体障害者と交流することに対する態度の改善に直接影響を及ぼすほどではないことがわかった。このように，表記の交流への効果は間接的で，直接身体障害者に対する交流態度を改善させるものではなかった。したがって，表記の変更によって健常大学生と身体障害学生の交流が改善されるということは考えにくい。このように，表記の効果は非常に限定的であることが示された。

もともと「障がい者」への表記変更の動きは，当事者が「害」から受けるネガティブなイメージに抵抗があるとして始まったものである。本結果は，このように，表記変更の動きが関係者によって進められてきた背景を表しており，表記の効果は，身体障害者と接触経験の有る者のような，身体障害者に相対的に近い存在の中で展開されていることを示すものとなった。しかしながら，身体障害者を取り巻く環境の改善には，身体障害者に関わる者もそうでない者も，両者の協力が必要である。したがって身体障害者との接触経験のない者にとっても態度を変容させるような試みを考えることは重要なことである。交流態度の変容には，本研究でみられた3つの主要なイメージ「社会的不利」「尊敬」「同情」を検討することが重要であることがパスモデルから考えられる(Figure 2)。特に，身体障害者に対する「尊敬」のイメージの上昇は，接触経験の有無にかかわらず，交流態度の改善に影響を与えるということが示唆された。身体障害者に対する「尊敬」のイメージについて検討することは，身体障害者に対する交流態度の改善に重要なイメージであると考えられる。

今日，社会は障害者の権利を尊重し，様々な試みが施されている。表記の問題もそのひとつといえよう。しかし，やみくもにただ実施するだけでなく，その効果を吟味することによってこそ，質の向上につながると考えられる。効果の限界と可能性を明らかにし，その後の施策を展開していくことが障害者を取り巻く環境の改善につながるであろう。このような点から，本研究の結果は，障害者に関する施策の改善を導く上で，重要な意味を持つといえる。そして，忘れてはならないのは，「障害」「障がい」表記の議論の背景には，障害者に対する偏見や差別，誤った理解があるということである（相川・仁平, 2005；後藤, 2009）。表記がもたらす影響力の限界を踏まえ，彼らを「障害者」たらしめている「障害」が改善されるような研究が，今後ますます期待される。

本研究の限界と今後の課題

最後に，本研究の限界と今後の課題を述べる。本研究の調査は大学生を対象としているため，大学生以外を対象に実施した場合には，本研究結果とはまた異なる表記の効果がみられる可能性がある。また，本研究では身体障害者に対する態度に表記が及ぼす影響を検

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

討したが，他の障害種を対象とした場合には結果が異なってくる可能性があるだろう。障害種に共通する点もあれば，異なる点もあると考えられ，異なる障害種に対して，表記の効果がどのように現れるかは今後比較検討することが重要である。

また，本研究で行った調査は表記の一時的効果であることが考えられ，持続的効果や，表記の差異による認知構造・態度の変容プロセスなどについて，本研究では十分に明らかにできなかった。持続的にひらがな表記に接することで交流態度に効果をもたらす可能性も考えられる。さらに，本研究では表記の効果を接触経験との関連から検討したが，障害者との接触経験は障害者に対する関心や知識など，それ自体に多くの要因を含んでいるため(Higgs, 1975)，接触経験の何が表記の効果を可能にしているのかを知るためには接触経験の中身を掘り下げ，それらの要因について調べる必要がある。

今後これらの点を検討していくことで，表記の効果に関するより正確な評価が可能となると考えられる。

引用文献

Ahlborn, L. J., Panek, P. E., & Jungers, M. K. (2008). College students' perception of persons with intellectual disability at three different ages. *Research in Development Disabilities*, **29**, 61-69.

相川恵子・仁平義明 (2005). 子どもに障害をどう説明するか―すべての先生・お母さん・お父さんのために― ブレーン出版

飽戸 弘 (1970). イメージの心理学 潮出版社

Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA : Addison-Wesley. (オールポート, G. W. 原谷達夫・野村 昭 (訳) (1968). 偏見の心理 培風館)

安藤隆男 (1989). 養護学校在籍が肢体不自由児の態度変容に及ぼす効果 特殊教育学研究, **27**, 29-36. (Ando, T. (1989). Effects of experiences in a special school on changes in the attitudes of children with physical disabilities. *Japanese Journal of Special Education*, **27**, 29-36.)

Angermeyer, M. C., & Matschinger, H. (2003). Public beliefs about schizophrenia and depression : Similarities and differences. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, **38**, 526-534.

有田浩子 (2005). ご存知でしたか「障がい者」表記 毎日新聞 9月18日朝刊

Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2007). The BIAS map : Behaviors from intergroup affect and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **92**, 631-648.

Fisher, K., & Hanspal, R. (1998). Body image and patients with amputations : Does the prosthesis maintain the balance ? *International Journal of Rehabilitation Research*, **21**, 355-363.

岐阜市 (2008). 「障がい」の表記に平成20年4月1日から改めました 岐阜市役所 〈http://www.city.gifu.lg.jp/〉 (2008年12月8日)

後藤勝美 (2009). 障害を「障がい」とする意味は 朝日新聞 1月23日朝刊

Hevey, D. (1993). The tragedy principle : Strategies for change in the representation of disabled people. In J. Swain, V. Finkelstein, S. French, & M. Oliver (Eds.), *Disabling barriers : Enabling environments* (pp. 116-121). London : Sage Publications.

Higgs, R. W. (1975). Attitude formation—contact or information ? *Exceptional Children*, **41**, 496-497.

猪股佐登留 (1982). 態度の心理学 (現代の心理学；8) 培風館

岩下豊彦 (1983). SD法によるイメージの測定 川島書店

上瀬由美子 (2001). 視覚障害者一般に対する態度：測定尺度の作成と接触経験・能力認知との関連 情報と社会, **11**, 27-36.

河内清彦 (2001). 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造―性及び専攻学科との関連― 教育心理学研究, **49**, 81-90. (Kawauchi, K. (2001). College students' meaning structure of image of blind students and deaf students : Gender and major fields. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 81-90.)

河内清彦 (2002). 視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造―自己効力感，視覚障害者観，ボランティアイメージおよび支援意欲との関連― 特殊教育学研究, **39**, 33-45. (Kawauchi, K. (2002). Sighted college students' attitudes toward academic supports for peers with visual impairments : Self-efficacy, attitudes toward blind persons, image of volunteering, and willingness to support. *Japanese Journal of Special*

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

Education, **39**, 33-45.)

河内清彦 (2003). 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討—聴覚障害及び視覚障害条件の影響について— 特殊教育学研究, **40**, 451-461. (Kawauchi, K. (2003). Validity and reliability of General-Purpose Scale of Self-Efficacy Beliefs in Interactions with Students with Disabilities. *Japanese Journal of Special Education*, **40**, 451-461.)

河内清彦 (2004). 障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件, 対人場面及び個人的要因の影響 教育心理学研究, **52**, 437-447. (Kawauchi, K. (2004). University students' self-efficacy expectations and attitudes toward interactions with peers with disabilities : Influence of disabling condition, interpersonal situation, and personal characteristics. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 437-447.)

河内清彦 (2006). 障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度, 友人関係, 援助行動, ボランティア活動を中心に— 教育心理学研究, **54**, 509-521. (Kawauchi, K. (2006). Type of contact with people with and without disabilities and the reluctance of college students without disabilities to interact with peers with disabilities. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **54**, 509-521.)

河内清彦・四日市 章 (1998). 感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する健常学生の自己効力に関する研究 教育心理学研究, **46**, 106-114. (Kawauchi, K., & Yokkaichi, A. (1998). The self-efficacy expectation of non-disabled students about interactions with students with sensory impairments in college context. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **46**, 106-114.)

熊田政信 (2002). 「障害」は「障碍」(「障礙」) と表記すべきである 国立身体障害者リハビリテーションセンター, No. 226

MacLean, D., & Gannon, D. (1995). Measuring attitudes toward disability : The Interaction with Disabled Persons Scale revisited. *Journal of Social Behavior and Personality*, **10**, 791-806.

McCarthy, E. A. (1984). Is handicap external to the person and therefore "man made"? *British Journal of Mental Subnormality*, **30**, 3-7.

三重県健康福祉部 (2006). 「障がい者」表記に改めます 三重県健康福祉部〈www.pref.mie.jp/kenki-ka/SOGOH/hyouki.html〉(2008年8月26日)

松村孝雄・横川剛毅 (2002). 知的障害者のイメージとその規定要因 東海大学紀要, **77**, 104-112.

中司利一 (1988). 日本と韓国における大学生による肢体不自由児に対するイメージ 特殊教育学研究, **25**(4), 29-42. (Nakatsukasa, T. (1988). College students' images of a motor-handicapped child in Japan and Korea. *Japanese Journal of Special Education*, **25**(4), 29-42.)

生川善雄・梅谷忠勇・前川久男 (2005). 知的障害者に関する態度の文献研究：態度の多次元的研究に焦点を当てて 千葉大学教育学部研究紀要, **54**, 15-23.

大谷博俊 (2001). 交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成—態度と事前指導における情報提供, 交流経験, 評価対象となる知的障害児の特定との関連性の検討— 特殊教育学研究, **39**(1), 17-24. (Otani, H. (2001). Formation of attitudes toward children with mental retardation by other children : Educational integration. *Japanese Journal of Special Education*, **39**, 17-24.)

Ostrom, T. M. (1969). The relationship between the affective, behavioral, and cognitive components of attitude. *Journal of Experimental Social Psychology*, **5**, 12-30.

参議院法制局 (1998). 精神薄弱の用語の整理のための関係法律の一部を改正する法律 法律第百十号

Scott, R. A. (1969). *The making of blind men : A study of adult socialization*. New York : Russell Sage Foundation. (スコット, R. A. 三橋 修 (監訳・解説) 金 治憲 (訳) (1992). 盲人はつくられる—大人の社会化の一研究—(pp. 48-51) 東信堂)

Sondhaus, E. L., Kurtz, R., & Strube, M. J. (2001). Body attitude, gender, and self-concept : A 30-year perspective. *Journal of Psychology*, **135**, 413-329.

杉島一郎・賀集 寛 (1992). 日本語における表記形態が単語の内包的意味に及ぼす影響 人文論究, **41**(4), 15-30.

徳珍温子・藤田大輔 (2005). 女子学生・生徒の「身体的」障害者イメージについての一考察 大阪信愛女学院短期大学紀要, **39**, 9-20.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

豊村和真 (2005). 学生の障害児者に対する受容的態度に関する研究 北星論集, **42**, 87-100.

浮田 潤・杉島一郎・皆川直凡・井上道雄・賀集 寛 (1996). 日本語の表記形態に関する心理学的研究 心理学モノグラフ, No.25, 日本心理学会モノグラフ委員会

山内隆久 (1996). 偏見解消の心理—対人接触による障害者の理解 ナカニシヤ出版

安田治正 (2005). "負のイメージ"生む「障害者」どう表記？ 北の鈴, No. 22

渡辺弘純・曽我知子 (2002). 大学生における障害者との過去の活動経験がその受容に及ぼす影響 愛媛大学教育学部紀要, **49**(1), 43-57.

Willner, P., & Smith, M. (2008). Can attribution theory explain carers' propensity to help men with intellectual disabilities who display inappropriate sexual behaviour? *Journal of Intellectual Disability Research*, **52**, 79-88.

Zajonc, R. B. (1998). Emotions. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey (Eds.), *The handbook of social psychology*. Vol. 1 (4th ed.) (pp. 591-632). Boston, MA : McGraw-Hill.

全国障害学生支援センター (2008). 大学案内 2008 障害者版 全国障害学生支援センター

謝　辞

本論文の執筆に当たり，京都大学教育学研究科 木村洋太さん，唐牛祐輔さん，前原由喜夫さんには貴重なコメントをいただきました。また，同研究科 常深浩平さん，大阪音楽大学 平山るみさん，調査参加者の方々には調査の実施・遂行にご協力いただきました。本研究に関わってくださった皆様に心から感謝申し上げます。

(2008.8.29 受稿, '09.11.4 受理)

Effect of the Writing System Used for a Japanese Word Meaning "People With Disabilities" on Attitudes Toward People With Physical Disabilities

Tokika Kurita and Takashi Kusumi (Graduate School of Education, Kyoto University)

Japanese Journal of Educational Psychology, 2010, 58, 129—139

In Japanese, various writing systems can be used for part of a word that means "people with disabilities". The purpose of the present study was to examine the effect of the writing system used on attitudes toward people with physical disabilities. Undergraduate and graduate students completed questionnaires in which part of a word meaning "people with physical disabilities" was written in either hiragana or kanji. The effect of the writing system that was used on the participants' image of people with physical disabilities and their attitudes about interacting with such people was investigated. The results showed that when hiragana was used for writing part of the word, respect for people with physical disabilities improved among those students who had had prior contact with such people. However, there was no effect of the writing system on other aspects of their attitudes toward people with physical disabilities or on attitudes about interacting with them, nor on the attitudes of the students who had had no contact with people with physical disabilities.

Key Words : writing systems, physical disability (attitudes toward), contact, students

NII-Electronic Library Service